

「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」 報告・感想文



財団法人日本科学協会
教育・研究図書有効活用プロジェクト

目 次

上海海事大学（南部中継大学）図書館館長、訪日団長 陳偉炯	2
上海交通大学図書館 陳進	4
上海海事大学図書館館長助理 王慧	6
蘭州大学図書館館長 葉麗雯	8
大連理工大学（北部中継大学）図書館館長 楊海天	10
吉林大学図書館館長 李書源	11
大連医科大学図書館副館長 劉薇薇	13
遼寧師範大学図書館館長 石玉廷	15
黒龍江大学図書館館長 趙桂榮	17
黒龍江東方学院 図書館館長 霍燦如	18
チチハル大学図書館館長 張德貴	19
鷄西大学図書館館長 李福貴	20
延辺大学図書館 采編部主任 黄美蘭	21
長春師範学院図書館副館長 劉立強	22
中国医科大学図書館館長 郭繼軍	23
大連外国語学院 図書館館長 劉日昇	23
大連理工大学図書館副館長 劉斌	26
遼寧對外經貿学院図書館館長 栾美晨	27
清華大学図書館副館長 陳傑渝	28
中国社会科学院 近代史研究所 図書館館員 王北紅	29
南京大学図書館副館長 羅鈞	30
江南大学図書館副館長 謝翠林	31
寧波大学図書館副館長 趙則玲	32
貴州大学図書館館長 易寧	34
雲南大学図書館副館長 樊泳雪	35
広西師範大学図書館館長 蔣芳生	36

※中国語の原文に忠実に和訳しました。

「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」報告書

上海海事大学（南部中継大学）図書館館長、訪日団長 陳偉炯

1. 訪日団の概要



日本財団と日本科学協会の招聘を受け、日本から図書の寄贈を受けた「第5回中国大学図書館担当者訪日団」は、2011年2月15日から2月22日まで8日間の日程で日本を訪問した。訪日団員は、図書寄贈を受けている28館の中の24館の館長、副館長など26名で構成されていた。団長は寄贈図書の南部中継拠点である上海海事大学図書館の陳偉炯館長で、館長補佐の王慧さんが今回の訪日団の中国側の事務局となり、一行と共に訪日した。

2. 訪問の経過

今回の訪日団は、2月15日、北京、上海、大連の各空港から全日空便により成田空港に到着し、その夜は日本科学協会の伊藤隆常務理事から歓迎の挨拶を頂いた。

2月16日の午前中、日本女子大学田中功教授の講演「日本大学図書館の現状と最新の動向」を聴講して、熱烈的な討論を行った。その後、全団員が日本財団の笹川陽平会長と会見したが、会見を通して、団員たちの心には日本財団が中日友好のために行ってきた事業に関して極めて深い印象が残った。午後、訪日団一同は、日本大学法学部の図書館を訪問した。事務課の担当者が同館の状況を紹介するとともに、全館を案内してくれた。夜は、日本財団主催の盛大な歓迎会があったが、日本財団の前田常務理事、日本科学協会の伊藤常務理事等が出席され、中日の主客双方が親身に話し合い、楽しく、うち解けた雰囲気の中で熱気の会となった。

2月17日の午前中、日本科学協会が寄贈図書の整備を委託している倉庫会社を見学した。同社の市川会長から説明を伺い、また協会の顧先生から補足説明を頂き、一同は図書寄贈事業の公益性、厳しさと複雑さを詳細に理解し、図書寄贈業務に対する日本科学協会熱意と職業意識に大いなる敬意を感じた。

午後は国立国会図書館を視察した。同館の紹介映像を見た後、地下書庫と閲覧スペースを見学し、ホールのあらしを把握した。日本が図書保存のための法律に定めたこと、図書館の設計様式、内部管理について、素晴らしいという印象が心に残った。夜は日本科学協会の大島美恵子会長主催の歓迎会があったが、中日双方そして訪日団員同士が気軽な雰囲気の中で親密にふれあうことができた。

2月18日、羽田から沖縄に移動した。豊見城市の宜保市長を表敬訪問したが、団員たちは同市の暖かさや真心に感動し、同市の順調な発展を喜ばしく思った。

2月19日、午前中は琉球村と首里城を見学し、琉球の歴史と文化を知った。午後はひめゆり平和祈念資料館を見学した。

2月20日、沖縄から京都に移動し、金閣寺と清水寺を見学したが、日本の文化が内包する素朴さと重々しさを味わった。

2月21日、午前、関西学院大学図書館を訪問した。杉原学長、Martin Collick 副学長博士、奥野図書館館長と主なスタッフが出迎えて対応してくれた。学長より大学の概要、奥野館長より図書館の状況が紹介された。団員たちは図書館の全貌を視察し、とても深く引きつけられた。

昼は大阪城を見学し、その後、同志社大学の図書館を視察した。百合野館長他に出迎えていただき、団員たちは興味を持ったことについて討論した。大阪へのバスの中で、団員たちは、図書寄贈に係る業務を更に進めるにはどうすべきか、寄贈図書の効果をよりよく発揮させるにはどうすべきかについて、熱い意見交換をした。夜は、伊藤常務理事主催の歓送会があった。

2月22日、訪日団は関西空港を発ち、それぞれ上海、北京、大連へと向かった。

3. 訪日感想と収穫

(1) 図書寄贈事業の公益性、その努力、厳しき、細かさ、苦勞に感動

寄贈図書を整備する倉庫会社、日本財団などの訪問により、日本科学協会の図書寄贈事業は、純粋に日本の民間組織が中国政府の許可の中で実施しているものであることが理解できた。日本の人々への周知に

努め、図書を必要とする中国の学生のため資源を収集し、何回もの選定を行い、リスト作成、中国側と連絡・調整し、仕分けし直し、取りまとめ、梱包・発送・運搬・通関するというプロセスを経て、図書は中国側の中継拠点に送られている。そして、通関手続きを経て、寄贈先の図書館へ届けられるのである。寄贈図書の供給体制には努力と厳しさと細やかさがある。日本経済は不景気であり、しかも、有償で本を買い取るという競合もあり、さらには、経費的な関係から理想的な物流業者が極めて見つかりにくいという状況にあって、日本科学協会の職員たちは非常に苦勞しているようだが、成果は顕著であり、寄贈先の館長たちはとても感動している。視察を通じた認識、理解、感動により、寄贈先の館長たちは図書寄贈事業をより深く尊重するようになった。図書寄贈事業により迅速に早くより良く協力することにより、寄贈図書の効果をより良く発揮させたいと考えている。

(2) 日本の図書館は専門的、現代的、効率的、実務的

田中功先生の講話を聴講し、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館、国立国会図書館を視察して深く感じたことは、日本の図書館における蔵書体系が非常にシステムチックで厳格であり、保管が完備されていて、しかも掲示や案内のシステムが素晴らしいということである。関西学院大学図書館は、その典型的なケースであろう。閲覧サービス体系は読者中心で、行き届いており非常に周到である。潤沢な費用を投じて現代的な電視図書閲覧システムを構築し、読者の便宜と利用率の向上に資している。形式はとても現代的で、効率は非常に高い。専任司書と外部から派遣された館員によるチームはシンプルであるが、利用者が非常に多いため、投資対効果がとても高い。電子化のレベルとても高い日本にありながら、RFID 図書管理システムが見受けられないのは、日本の図書館業界が流行りに動かされず、実際の効果を求めており、非常に実務的であることを示している。国会図書館の図書保存の立法は、日本社会がその領域内において人類文明の記載を体系的に保存するために確立された保証制度であり、敬服の念を抱かせる。これらの全てが、中国の館長たちに、蔵書、館員、サービス、制度の面に関して素晴らしく深い印象を残している。

(3) 日本の人々の親切、誠実、落ち着き

懇談会の度、中日双方の交流は非常に解け、雰囲気は非常に盛り上がった。道中で助けを求めると、日本の人々は親切にしてくれた。買い物をすると、日本の店員はいつも誠実であった。商品不足を真剣に教えてくれる人までいた。指導層である笹川陽平会長は和やかで親しみやすく、大島会長は優雅で人付き合いが良く、伊藤常務理事はさっぱりした人で、顧文君先生は親切で、厳格で、落ち着きがあり、思い切りがいい人でした。Aさん、Bさん、Cさんなどの職員は真面目にこつこつと、着実に仕事を進め、初日のガイド傅さんは情熱的で、専門的で、周到であった。こうした情熱、穏やかさ、誠実さ、落ち着きのある人徳は、至る所で見られ、例外はほとんどなかった。

(4) 体系的で精緻で安全な日本の社会管理

数日間の訪日であり、深く入り込んだとは言えないが、凡そ感じたことは、日本社会の各システムが厳格に構築されており、しかも厳守されていて、人々が意識的に順守しているということです。さらに、各システムは順調且つ効果的に連携しており、協調していた。このため、社会全体を構成するシステムが精緻、高効率で、信頼性と安全性が保たれているのだ。こうしたことは、飛行機の上から眺めたことから、訪問中に感じたことから、なくしものが何度も戻ってきたことからさえも、証明されている。

(5) 図書寄贈事業と図書館の視察により奮起された献上の精神

日本の図書寄贈事業や図書館業界と直に触れたことにより、日本の同業者の仕事への情熱、専門性の高さや効率性の良さに全ての団員が感動した。また、21日には京都から大阪への車中で、団長である上海海事大学の陳偉炯館長が座長となり、寄贈図書と図書館の機能をよりよく発展させるための討論が行われた。南京大学の羅鈞館長、中国医科大学の郭継軍館長、大連理工大学の劉斌館長、黒龍江東方学院の霍燦如館長などが次々に発言し、議論は白熱し、基本的な意向が形成された。

4. 今後の行動計画

「京都－大阪の車中の討論会」での意向と帰国後のやりとりから、以下のような共通認識が得られた。

日本財団・日本科学協会の図書寄贈の南部地域の中継拠点である上海海事大学が責任者となり、2011年5

月下旬に寄贈図書を受けている 29 館の図書館担当者を招集し、上海浦東新区臨港新城で図書寄贈事業と大学図書館業務のシンポジウムを開催するとともに、寄贈図書受入担当者による交流や研究討論、図書目録作成人員の養成研修と協力を推進する。これにより、図書寄贈事業をより順調で効率の高いものとし、寄贈図書がより大きな力を発揮できるよう促進する。

5. まとめ

訪日期間は短いものであったが、深く印象に残っている。中日両国図書館の協働のもと、図書寄贈事業の業務はより順調で優れたものになる。これらの図書は中国の大学生の日本語や日本知識の学習、科学技術知識の学習、日本文化の理解、感情のやりとりを促進して中日の民間交流を順調なものにし、中日の友好関係発展を促進するといった面で長期的な作用を発揮する。

国境を越えた図書寄贈が友好の橋に—迎春の旅で親友の楽章—

上海交通大学図書館 陳進



2011年2月15日から2月22日、日本科学協会の招きを受け、「第5回中国大学図書館担当訪日団」の一員として一週間、日本を訪問し交流する機会を得ることができた。今回の隣国への視察はちょうど早春の頃で寒暖の入り交じる気候だったが、日本財団、日本科学協会为首脳部と同行者には手厚いもてなしを受け、親切に面倒を見ていただけて、あたかも春の日差しのような暖かさを感じた。そして、日本人の中国に対する友好の情をさらに身に染みて感じたものである。空も中日の友好交流に歓迎の賛歌を与えてくれたのか、予報の悪天候を覆し好天が続いた。

私自身については、学術面で日本と長期的に交流や協力をしてきている。1986年、留学生として日本の小野測器で信号処理と振動分析の専門知識を学んだ。後、東京工業大学で博士課程に進み、幸いにして同大学の客員教授、大阪の都市大学での非常勤講師となり、日本の大学における教育研究業務に触れる機会を得た。日本と深い縁があることは私の運命らしい。中国国内での研究業務でさえ、日本のFUJITEC社などと長期研究プロジェクトに携わっているのだ。日本の同業者と往来するうち、教育を受け互いに学び、互いに理解し協力するといった点でだけでなく、私は日本からたくさんの恩恵を受けた。私の成長過程に重要な基礎を構築してもらったのである。

私は、それまでも何度か日本を訪れているが、それは基本的に学術上の交流と協力に限られていた。主に学術と専門分野の観点から、日本の科学技術発展と厳格な研究モデルについては多くのことを理解している。しかし、今回は日本科学協会会長である気品ある大島美恵子女史にお招きいただき、初めて図書館館長として日本の図書館を視察したのである。おのずと全く新しい角度から日本を考察する機会となり、私が見たものは多い。今回の訪日では日本科学協会の伊藤隆常務理事と顧文君女史に心のこもった手配をいただき、日本文化の魅力をより深く感じることができた。日本人の仕事熱心さ、仕事における周到な手配と細やかな思いやりを感じることができ、日本科学協会のご厚意と苦心のほどを深く感じた。また、同協会が科学教育及び文化の発展を促進するため、学術および教育の領域で各種活動を行っており、世界平和を維持するため努力し続けて来られたことにも深く敬服している。特に1999年以来、同協会が始めた「教育・研究図書有効活用プロジェクト」では、日本の出版社、企業、大学、研究機関などから幅広く寄贈図書を募り、選定と整備を行い、中国の大学図書館に寄贈している。財団は、殆ど全ての費用を負担している。10余年の発展を経て、2010年7月現在、財団法人日本科学協会が中国の28大学と1研究機関に寄贈した図書は累計で240万冊に達している。当館も幸いにして当初からの寄贈対象大学に選定され、これまで合計7万冊の寄贈を受けた。寄贈を受けた図書は各分野、豊富な学科や領域にわたっており、当大学の教員や学生が日本の科学技術、歴史文化、政治経済、文学芸術、思想哲学、地理社会などを学び研究するための豊かで貴重な資料となっている。これらの図書は当館の蔵書を豊かにしただけでなく、中日両国の文化交流とコミュニケーションに友好の見えない橋を築いている。

今回の視察交流は、日本科学協会が誠心誠意を込めて企画手配したものであるが、相互交流は実質的な効果を非常に重視しており、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の健全な発展を促進するのみならず、

相互理解と友好を増進するという目標も達成され、図書館関係者の国際交流を促進するための良好な基礎を構築することができた。まさに日本財団の笹川陽平会長が仰ったとおり、単なる「親日」がよりレベルの深い「知日」に転換できたのである。もっと知り合わなければ、全てを知る友人ではなく、最終的にはその人を深く理解していることにはならない。だから、私も、真の友情こそ長く続き絶えず発展すると固く信じている。

今回の訪問で、日本の大学図書館は全体として整備されているという印象を受けた。日本女子大学の田中功名誉教授によると、日本の大学図書館は合計760館あり、そのうちの70%は私立大学の図書館ということである。近年は利用者数の減少に伴い、図書館の職員数も少しずつ減少してきた。10年前と比べて1200人ほど減少している。中国の大学図書館との違いは、90%以上の大学図書館で学外要員の活用を認めていることである。また、別の面では、中国と同様、情報リテラシー教育が大学図書館で重要性を増しつつあることである。94%近い日本の図書館で、情報リテラシー教育が全面的に実施されている。同時に、日本の大学図書館は専門図書館員の導入と育成を非常に重視している。図書館員が備えるべき能力、特に電子化ブームについて、優れた情報を提供する能力に対して新たな需要が出てきたのだ。“サードプレイス”としての図書館、つまり“学びを共有する空間”の構築が魅力に満ちた図書館を建設し、図書館を知識の生産場所、想像力の育成場所にすることは、新たな発展方向として、当館の発展構想と偶然にも一致している。

交流訪問では、前後して（東京）日本大学法学部図書館、国立国会図書館、（大阪）関西学院大学図書館、（京都）同志社大学図書館を見学した。日本の図書館サービスの優良さが十分に感じられ、日本の同業における「人を基本」とするサービス理念、館員の生産性と勤務態度がより深く印象に残った。中でも特筆に値するのは、国会図書館の理念「真理がわれらを自由にする」というもので、利用者が空間の制限を受けず、来館者と同様のサービスを受けられるように努めており、さらに国内外の各種図書館と密接な協力関係を築き、情報の共有や交換を行っていることである。日本大学法学部図書館が作成している「図書管理用ガイド」、図書館の建物とフロアをカラーで案内したリーフレットは、簡明かつ実用的で、保存しやすく、利用者が図書館を利用するのに便宜を提供している。関西学院大学図書館が作成している「教員の推薦図書」は、ハンドブック形式で推薦図書の基本情報を列記するだけでなく、教員による簡単な紹介も添えられている。内容が非常に実用的で、十分な閲覧指導効果がある。同志社大学図書館の刊行物『書籍館』も非常に特徴的である。紙面は多くないものの、挿絵も文章も内容豊富で面白く、図書館の最新情報とサービスを逐一マンガ形式で表現しており、とても気に入った。日本の大学図書館における機関リポジトリ（Institutional Repository）の建設も広く重視されている。機関リポジトリを通じて教員や学生の研究成果を電子データ方式で保存し、ネットワーク経由で広めており、成果の保存を保障するとともに、学術交流を促進している。四つの図書館を見学した際、専門の職員がどこも非常に少ないことに気づいた。例えば、関西学院大学の図書館は職員がわずか24人で、11の学部サービスしている。管理する蔵書は145万冊、定期刊行物は6000種余り、視聴覚資料は50,000点を超える。その他データベース88件と電子刊行物75,000種余りのメンテナンスが必要だ。しかし、図書館全体の業務は整然と行われており、建物は美しく優雅で、館員の印象もみな上品で雅やかで礼儀正しく、さっぱりしていて上品であり、親切でサービスが周到だった。業務効率の高さと熱心な勤務態度は容易に感じ取れる。

すきのない訪問日程の中で、日本科学協会は埼玉県にある寄贈図書の整備作業場の見学も手配してくださった。私達が自ら寄贈図書の貴重さを体験できたのだ！日本国民の心からの友情がこもった一冊一冊の図書、定期刊行物は、収集から整理、分類、加工を経て、最後に箱詰めとなって発送される。どのプロセスにも友愛、待望、祝福の心が満たされていた。これは日本国民の偉大な友情の証である！

日程は緊迫していたものの、日本科学協会の合理的で巧みな手配により、きわめて有意義な文化の現地調査活動が行われた。東京の浅草寺を見学し、豊見城市の宜保晴毅市長と面会して、琉球村と首里城へ行き、ひめゆり平和祈念資料館を見学し、大阪城を見回して、私たちは身近に日本文化の魅力を感じ取ることができた。このほか、特徴ある各種日本料理を味わうこともできた。こうした付加活動により、日本の歴史、文化、風俗、人情などについてより深く理解することができた。

名残を惜しむうちに訪日の最終日を迎えたが、素晴らしい記憶は心に根付いている。今回の日本訪問は、

私（団員には冗談で“日本通”と呼ばれていた）という図書館の新人にとって、全く新しい体験だった。多忙な行程で少し旅の疲れも感じたが、収穫はそれ以上に大きかったように思う。この機会をお借りして、心から、特に日本財団、日本科学協会の幹部に感謝したい。特に、顧文君先生の言葉に表れない専門性と心がけ、Aさんの何でも聞き入れてくれた友情、Bさんの親切な付き添い…。私は思わず唐詩を思い出した。「冬が至れば氷霜が別れを恨み、春が来れば花鳥が情のようだ」中日両国民の友好的な善隣関係には、冬が去って春が来るかのようなのである。両国民が絶えず理解と交流を増進し知り合っていけば、自ずと花は開き、実を結ぶ。

中日両国における恒久平和と相互に利益ある発展の維持と促進のため、両国の友好交流促進と協力事業の傑出した貢献に対して、日本財団、日本科学協会に心から感謝する！同様の活動による促進と親睦を通じて、中日両国民がより調和した親友の楽章を奏でられることを信じて！

寄贈圖書の力を発揮 中日両国民の友情を共に築こう

上海海事大学図書館館長助理 王慧



2011年2月15日～22日、8日間の「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」活動が行われ、円満な成功を得た。日本科学協会「教育・研究図書有効活用プロジェクト」で中国南部の中継拠点である上海海事大学図書館の一員として、今回の訪日活動に参加することができた。

活動の日程は詰まっており、合計で4つの図書館を見学した。国立国会図書館、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館は、4館それぞれに特徴があり、深く印象に残った。

国立国会図書館は日本唯一の国立図書館であり、献本制度がある。献本制度によって国内で出版された図書、定期刊行物、新聞、電子出版物を収集しており、全国の文献を保存するという重要な役割を果たしている。また同館の文献保護業務はとても入念なもので、資料は全て閲覧と複写しかできず、しかも全て図書館職員が行うことになっている。唯一の閉架式図書館なのかもしれない。新旧二棟の図書館は異なる時期に建てられたが、風格は一体化しており、どこも突出した感じはない。鉄筋コンクリート構造のようだが、質素で広々としており品格がある。

日本大学法学部図書館の主な材質はガラスカーテンウォールである。特に印象的だったのは、エレベーターホールの表示がとてもヒューマニズされていたことである。どこのフロアにいても、フロア表示で他のフロアと明確に区別がつく。このため、利用者はすぐ自分が何階にいるのかを明確に知ることができるのだ。同館の定期刊行物閲覧室にあった椅子も非常に芸術的なデザインだった。職員の作業エリアは利用者数に比べて狭く、利用者にとって最適な学習空間を提供している。

関西学院大学はキャンパス全体で建物が調和していて美しい。同大学は国際社会に広く貢献できる人材の育成に力を尽くしているため、留学生が多い。図書館は関西学院大学のシンボルで、キャンパスの真ん中に建てられている。図書館に入ると目に映るのは、三本の帯状ガイド表示である。フロアの高さと各フロアの資料分布が、三本の帯で明確に示されている。館内において独特な風景をなしているが、利用者は同館の主な蔵書分布状況を一目で知ることができる。同館の各フロアでは避難通路などの標識がいずれも簡潔に掲示されていた。また、図書館の機関誌を発行しており、その内容は充実している。新着図書の展示書架は、一本の柱を取り囲むように配置されているが、書架は低めで、入館ゲート付近に設けられている。同館の定期刊行物書架はとても現代的で実用的であると感じたが、有機ガラスで作られたものに違いない。最新刊が表面に直接陳列されていて、書架をスライドさせると内側にはバックナンバーが保管されている。有機ガラスを通してバックナンバーの状況をはっきりと見ることができる。同館は、主に米国の大学図書館様式を参照したもので、その風格が色濃く漂っている。同大学学長が見学のほぼ全行程に同行してくれた。同業者を重視してくれているというだけでなく、より多くの中国の大学との学術交流や友好関係を発展させたいという素晴らしい願望が十分に窺われた。

同志社大学のキャンパスは建物がレンガ色でほぼ統一されているが、図書館だけは違っている。キャンパスの真ん中に位置しながら、校門をくぐるとすぐ目に入ってくる。同館は関西学院大学図書館に比べると少

し小規模であるが、狭いながらも類似した新着図書の展示、教員推薦図書、図書館機関誌の発行などのサービスを提供している。総合カウンターが設けられていて、1階にあるということではないが、2階の分かりやすく開放的な中心部分にあり、各閲覧室とは向かい合っている形である。個人的にはこの位置関係が空いているように感じられた。3階から見下ろすと、カウンターの状況が一目瞭然である。館内の各フロアの閲覧室はいずれも書庫と一体化しているが、エリアの異なる蔵書を区別するため、図書はエリアごとに色分けされている。利用者が本を探しやすいうえ、館員が図書を並べるのにも便利である。

図書館の正門の入口の壁には“Learn to live, and live to learn”と刻まれた彫刻が掲げられている。恐らくこれが同館開設の趣旨なのだろう。

4つの図書館をひと通り見学してみて、恐らくこれらは日本の図書館界を代表するものだろうと感じた。日本の図書館をも代表しているはずである。特に、大学図書館の現状を代表しているのである。各館では可能な限り館内の面積を利用し、書架をほぼ満杯の状態にしている。書架の間、閲覧席の間には、利用者のための広い通路や明るく快適な環境を提供している。特に、各館の表示、案内板はとても入念に作られており、明確且つ特徴的であった。絨毯まで案内板となっているところさえあった。これなら、利用者は入館して直ぐに必要なものを見つけることができる。この点は学習に値するものの一つだと思う。

図書館見学の他に、日本の地理や景色、文化を知ること、今回の訪問活動に含まれていた。日本は海に浮かぶ島のため、四方が海に面している。また、民族の発展の歴史は、人文の景観、風土と人情の上でも民族の特徴が見られる。私たちが見学した浅草寺、金閣寺、清水寺にもそれぞれ発展の歴史がある。浅草寺の門前には、思わず足を止めたくなるような軽食、アクセサリー、土産物などの小さな店がひしめいており、どれも精巧に作られていた。全身に金色の上着を纏っているかのような金閣寺は遠目に見ることしかできないが、その独特の黄金の輝きは、当時この寺を建立した人が如何に黄金を好んでいたかを明示している。この寺は、アニメー休さんで中国人にも知られている。当時、明朝との貿易が比較的多く、当時の文化の発展に一定の貢献があった。清水寺は金閣寺よりも以前に建てられたものであるが、この寺の慈恩大師は、唐僧の日本における最初の弟子だと伝えられている。ガイドと離れてしまったため、この寺の歴史をそれほど具体的に知ることはできなかったが、中に安置されていたあの禅杖は、当時の唐僧が修行の時に持っていた禅杖を模倣したものではないだろうか。この完全なる木造寺院の総面積は13万平米に達する。中でも最も有名な“清水の舞台”は、50メートルの高さを139本の木の柱で支える構造であり、当時の工事が壮大なもので、非常に困難だったことが分かる。清水寺を見学する時、階段を伝って上っていき、手すりにもたれて眺めると、京都市の風景を一望することができる。

皇居、大阪城はいずれも賑やかな大都市にある、堀と堀に囲まれた古城である。大阪城は何度も戦火や雷で破壊されたが、この歴史的な価値を持つ城を保存するため、1931年に日本の民間が資金を集めて、天守閣を再建した。外観は5層だが内部には8層あり、7層以下は資料館、8層は展望台となっている。大阪城の城壁は堀に囲まれており、近くには景色の美しい庭園と楼閣がある。城内には百株にのぼる桜の木があり、ここは日本人の花見や行楽の最適地となっている。再建を経ているとは言え、当時この城を建設した時に費やされた労力、工事の壮大さは想像できる。東京にある皇居も、全体が堀に囲まれている。大部分が分厚い石壁、古い樹木や江戸時代の堀に隠されており、本当に遠景しか見ることができない。

沖縄にある琉球村は、この地域特有の民俗文化を保存するために建てられた人文的景観である。古代琉球をテーマとした、沖縄の古い文化を体験できるテーマパークである。村内には名高い琉球列島の伝統建築物が保存されており、当時の琉球の人々の暮らしと琉球の文化が生き生きと再現されている。園内では昔の琉球文化をテーマとするパフォーマンスがちょうど行われているところで、キャストたちが生き生きとしたパフォーマンスを見せていた。特に、琉球人が縁起物と尊ぶ獅子を演じる二人、よく響くラツパ、鼓による優美な楽曲、歌っているキャスト達には、観客から拍手が送られていた。

かつての琉球王国の都の遺跡である首里城は沖縄諸島の重要な古跡で、戦後に残った原型を見本に複製された、唐の風格を持つ建物である。国王が当時の国務を行い、使節と接見し、重要な祝典を催した場所で、中国、日本、沖縄の建築の特徴が融合したものであるが、四度も破壊に遭った。首里城の守礼門は沖縄の象徴と言われている。守礼門は1528年に着工され、屋根の中程には「守礼之邦」と記された額が飾られてい

る。これは「琉球は礼儀の国」という意味であり、琉球王国の精神、文明、風格を表している。これが守礼門の名の由来である。ここから当時の日本本土、中国、朝鮮半島と貿易を行っていた琉球王朝の国際性を垣間見ることができる。

日本科学協会は、上記の図書館や観光地の見学の他、寄贈図書の整備を委託している会社の見学も手配してくれた。中国の図書寄贈対象先の図書館館長たちは、図書が日本で収集されてから梱包され中国へ出荷されるまでのプロセス全体について理解を進めることができた。私たちが手に取るものは新刊図書ではないかもしれないし、完全には各大学の専攻と特に関係する書籍でもないかもしれない。ただ、中国の学生に日本の発展の現状、風土や人情、特に日本語の学習を理解してもらうためには、とても大きな作用がある。日本女子大学の田中功名誉教授による「日本の大学図書館の現状と最新の動向」を聴講し、また、日本の大学図書館を実地見学したことを基礎として、私たちは日本の大学図書館の建設状況と館員の方々の業務状況について理解を進めることができた。その中には参考になるもの、学ぶべきものがある。

上記の訪問や見学の行程、そして、ここには記していないのも全て、日本科学協会、特に「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の担当者が入念に企画してくれたものである。見学した図書館の手配から最も日本的な観光地まで、何れもこの事業に基づくものであり、しかも、中日両国民の間の民間交流と友情を広く深くするものであると深く感じた。

今回の訪日交流活動を通じ、このプロジェクトの中国南部の中継拠点担当者として、日本科学協会という図書寄贈事業の実施団体と積極的に協力し、関連業務により努力し、各受け入れ大学に確たるサービスを行い、自館が受け入れた寄贈図書がより多くの力を発揮できるよう努めたいと思った。

この場をお借りして、日本財団の笹川陽平会長、前田常務理事、日本科学協会の大島会長、伊藤常務理事および「教育・研究図書有効活用プロジェクト」責任者の顧文君女史と彼女の同僚である A さん、B さん、C さんに感謝を申し上げます。

私たちが共に努力して、この事業をより完全なものにできるよう心から希望するとともに、私たちの友情が桜の花のように美しく花開くことを祈って。

図書、社会、文化－日本視察の感想－

蘭州大学図書館館長 葉麗雯



2011年2月15日～2月22日、「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」に参加して、日本視察の機会に恵まれた。期間中、4つの図書館を見学し、日本財団及び日本科学協会の責任者と会見した。また、学術報告を聴講し、学術交流を行い、寄贈図書の配送倉庫と作業の流れを現地視察した。訪問先のいずれもが深く印象に残り、感じ取ったものはとても多い。

1. 図書寄贈事業に対する認識

1999年、日本科学協会が「教育・研究図書有効活用プロジェクト」をスタートさせた。日本の出版社、企業、大学、研究機関や個人が寄付した図書を整理、分類してから海外の大学や研究機関へ寄贈するというものである。現在、中国では28大学と1研究機関が受け入れ先に決まっており、合計239万冊の図書を受け取った。今回の訪日団は、日本科学協会の招聘により中国の寄贈対象機関が日本を訪問し、視察と交流を行うというものである。日本では、寄贈図書の配送倉庫と作業の流れについて説明を聞き現場を視察したことで、一冊一冊の図書が大変なものであることを深く認識することができた。寄贈図書には関係者の心血が凝縮されており、日本人の中国人に対する友好の気持ちが体现されているのである。寄贈図書の受入機関として、当大学が改善すべき業務は多い。私たちは、日本科学協会の図書寄贈プロジェクトの業務に積極的に協力し、業務に対する考え方のバランスをとり、業務の流れに精通して効率を高めるべきなのである。より重要なのは、寄贈された図書をしっかりと管理して十分にその効果を発揮させ、より多くの利用者に活用してもらい、本来の力を発揮させることである。

2. 図書館について感じたこと

日本では日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館と国会図書館の4図書館を見学し、また、「日本の大学図書館の現状と最新の動向」に関する学術報告を日本女子大学の田中教授から伺った。日本の図書館に対する一定の認識を得ることができ、先進的な管理理念をたくさん学ぶことができた。

日本の大学図書館は、建物こそ大きくないが、内部施設が先進的で全体が綿密に配置されており、サービスが充実していて直ぐに利用できる。図書館の各種サービスガイド、図書分類表、図書全体の配置図などが随所で見られた。閲覧室にはほぼどこでも検索用のパソコンとコピー機が備えられている。館内には個人用の学習室と共用会議室が設けられていた。

日本政府は国民の読書を積極的に提唱しており「読書立国」を提唱している。日本国民は読書をとっても重視しており、毎年の書籍購入量と読書量は世界でも上位に入る。日本では、情報化時代が訪れたとは言え、図書館で本を閲覧したり借りたりする利用者は減っていない。また、日本の大学図書館は92.1%が社会に開放されており、身分証明書さえあれば館内で閲覧することができる。

日本の図書館では管理が厳格で、利用者も文化的である。図書館内では携帯電話の使用と飲食が厳禁である。利用者は自主的に館内の各種規定を遵守しており、館内は静まりかえっている。全ての資料は順序よく並べられており、図書の損傷は少ないようだ。個別の規定違反があっても指導するのが主で、懲罰はないらしい。図書館はコーナーに行っても非常に清潔で落ち着いている。我々の見学時は、案内担当者も声を抑えて話しかけてきた。利用者の邪魔を恐れてのことである。しかし、中国の大学図書館は、時間が経つほど自由市場のようになってきている。携帯電話で話す者、飲食する者、朗読する者がどこにでもおり、利用者の周囲にはごみくずが堆積している。閉館時の館内は非常に雑然としており、図書館の神聖さはすっかりなくなっている。日本の図書館では、利用者に貸し出す総数も期間も中国より恵まれている。国会図書館では完全に閉架書庫だが、貸し出しカウンターと書庫の間には自動搬送ベルトがあり、貸し出しも返却も速やかに行われている。大学図書館では教育サービスをより重視している。閲覧室では教授推薦図書のコーナーや参考書の紹介が見られた。

日本の図書館では図書館員の分担がはっきりしており、業務効率が高い。日本の図書館には専門資格を持つ館員が少なく、人材企業から派遣された非専門職員の方が多い。彼らの職務分担は明確で、それぞれ職責を尽くしており、業務効率は高い。これに比べ、中国国内の大学図書館ではここ数年の求人要件が高まりつつある。本科生から大学院生まで、普通大学卒業生から「985」「211」重点大学の卒業生までおり、有資格者とそうでない館員の区分がない。館員組織は巨大だが専門性が低く、結果として人件費が高く付いている。館員組織の前途は明るいとは言えず、人材の浪費が深刻である。

3. 日本社会に対して感じたこと

日本での見学期間中、日本の都市や社会、人文に対する理解や接触の機会についても日本側が配慮してくれていた。

日本の国土面積は38万平方にも満たないが、人口は一億三千万人もいる。人口密度は非常に高いと言わなければならないが、この地と中国の都市とは感覚が全く違うことに気づいた。どこもかしこも整然としており、人が多くともがやがやした感じはない。日本人は全体的に秩序を好み、列に並ぶのも自主的に正常に行われるのだ。例えば、エスカレーターでは、人々は左側に立ち、急ぐ人を通すために右側を空けている。こうした様々な振舞いは、とても快適なものに感じられた。同時に、日本国民の素養の高さに深く賛嘆した。

ガイドの解説によると、日本国民の素養の高さは優れた教育の賜であるという。日本の教育は発達しており、国民が教育を受ける程度も高い。また、「自分のことはしっかりやって、他人の邪魔をしない」ということは、日本人が小さい頃から注ぎ込まれた生活理念であるが、これにより日本人は日常生活においても素養の高い振舞いをすることができ、結果的に自分にも他人にもためになっているのだ。

日本の都市部では道路が狭い。東京も例外ではない。道路が狭い上、車両はイギリスと同様の左側通行で、中国国内で右側通行に見慣れている私のような者にとっては、狭さがより強く感じられる。高速道路も決して広くはない。中国のそれのように幅広く、六車線や八車線あったりするところは珍しい。市街地で片側四車線の道路を見かけることは少なく、多くが対面片側二車線で、ひどい場合、幹線にもかかわらず、対面片側一車線だったこともあるが、意外にも渋滞はそれほど見られなかった。誰もが自主的に交通ルールを守り、

車は歩行者に道を譲る。耳障りなクラクションも騒がしい人の群れもなく、全てに秩序があって平和な落ち着きがあった。我々が乗っていたバスが十字路で左折しようとした時のこと、対面片側一車線だったため、向かい側の車道を占用せざるを得なかった。その時、対向車線には5台の乗用車がいたが、皆が遠慮してバスを先に通してくれた。中国国内ではあまり見られない現象である。

日本の道路はとても清潔で、殆どごみが見あたらない。至る所に痰の跡やごみが見られる中国の景色とは明らかなコントラストを見せている。ガイドの紹介によると、日本ではごみの分類が細かく、ポイ捨てなどの行為に厳しい処罰があるからだそうだ。日本では、ごみは可燃物、不燃物、びん・缶・トレー類に分けられている。聞くところによると、日本人は公共の場所で犬を散歩させる時には必ずごみ袋を持ち歩き、犬が排便するとすぐにその袋へ片付けて、ティッシュなどで地面を拭き取るという。

日本の社会は治安がよく、人々は信頼し合い、社会秩序が整っている。日本に滞在したわずか数日でも、鞆（パスポートと現金が入ったもの）をなくす、はぐれる（道に迷う）、衣服をなくすなどのことが起きたが、いずれもすぐに拾得者が警察や落とし主に届け出てくれて、無事に戻った。日本では全てのお手洗いにトイレットペーパーが置いてあり、常に何本か多めだったが、持ち去る者はいなかった。中国の首都空港にあるお手洗いでは、ペーパーボックスが鎖で固定されている。その訳は想像が付く。

日本では人権が重視されている。図書館の見学時に教えられたのだが、利用者がいるところでは写真を撮ってはならない。たとえ遠路はるばるやってきた客人であっても利用者の人権を侵害することはできず、勝手に他人の写真を撮ってはならないという。皇居の外にある草地では数人のホームレスが青いテントを張っていた。他人の干渉を受けず自由に暮らしており、いささか意外に感じた。ガイドの紹介によると、日本ではこのようなホームレスは少なくないという。彼らの中には人材が埋もれており、必ずしも貧乏人ではないのだそうだ。日本人は、誰も他人の幸せな生活を奪う権利を持たないと信じているのだ。

日本の飲食文化は中国と大いに違っている。日本での食事はとても節約されたものだった。毎食、小皿が何枚かあるだけで、料理も小皿の底に載るほどしかなかった。しゃぶしゃぶも数人で肉と野菜が一皿ずつ、一人一つしか飲み物をとれなかった。日本の町中に太った人があまり見られないのはこうしたことが原因かもしれない。中国国内であれば、きっと料理も飲み物もずっと大量である。その結果、中国人の三高（高脂肪、高血圧、高血糖）比率が高く、健康面で劣るのだ。中国人は本当に日本人から学ぶべきだ。節約を励行して浪費に反対し、低炭素でエコ、また腹八分目は健康によい。

わずか数日の旅で見聞きしたものは表面的なものに過ぎない。正しいという自信もないが、日本の社会経済の発達、美しい自然環境、文化的で礼儀正しい国民はやはり深く印象に残った。

今回の日本訪問では、日本財団、日本科学協会および図書寄贈プロジェクト室の皆さんから心のこもった接待を受けた。特に最初から最後まで随行してくれた顧文君先生である。その周到な手配とゆきとどいた配慮、厳格で実務的な仕事ぶりは深く印象に残り、我々はとても深く感動した。日本科学協会の伊藤常務理事は歓迎会を開いてくれただけでなく、わざわざ東京から大阪まで見送りに来てくださった。図書寄贈部門のAさん、Bさん、そして田中教授、通訳ガイドなどの皆さんにも大変お世話になった。きっと、この忘れがたい日々はお互いずっと覚えているだろう。中日両国民の友情が永遠に続くことを信じている。

訪日感想

大連理工大学（北部中継大学）図書館館長 楊海天



2月15日～2月22日、日本科学協会が実施した「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」活動に参加した。

訪問期間中、代表団は日本科学協会の関係責任者を訪問して、日本の大学図書館の現状に関する学術報告を聴き、同協会の寄贈図書業務を見学して、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館、国会図書館を見学した。

こうした交流活動に参加するのは二度目だが、新たに感じ取ったことは少なくない。

1. 四年が経過しているものの、図書寄贈事業の責任者および図書寄贈チームによる訪問団の接遇から、

日本財団、日本科学協会の日中文化交流に対する関心が変わっていないということが理解できた。

2. 寄贈図書の整備・保管をしている倉庫業者を見学した。大きくはないが業務は整然としており、中国の大学図書館に向けて発送される図書の一箱一箱を目の当たりにすることができた。寄贈図書の配送を担う日本側の人々の熱心さと一糸乱れぬ勤務態度に再び感動した。
3. 前回と比べ、団員構成は大きく変化したが、団員たちは直ぐにこの集団に溶け込むことができた。日本滞在中、食卓は中国全国津々浦々の館長達が交流する場となった。一部の館長については国内で面識があるという程度だったが、今回の一週間ですべて行動を共にすることにより、個人間の相互理解だけでなく、他大学の図書館についても業務や発展状況を理解することができ、団の解散時には名残惜しくさえ感じられた。団員全てはこの集団を評価しているし、日本科学協会が企画したこの交流の舞台にも深く感謝している。
4. 訪日の機会をいただき、現在の大学図書館発展における主な注目点、経費、資源、利用状況、職員構成、サービスモデルなどに関して日本の図書館担当者と真摯に交流をすることができた。日本の大学図書館のシンプルな職員構成は非常に印象深く心に残っている。恐らく国情が異なるため、国によって大学の図書館に求めるものも異なるのだろう。全体的な印象としては、日本の大学図書館が重点的に注目している問題が北米でのそれと異なるところである。図書資源の効果分析、図書館構造の変化などに対する関心は、北米ほどではなかったようである。

訪問は短かったが、収穫は多かった。最後に、日本科学協会の図書寄贈事業の北方中継拠点である大連理工大学図書館として、また私個人として、中日文化交流の橋を築き、兄弟図書館のためサービスする職責を尽くすべく、力の及ぶ限り努力すると申し上げたい。

訪日の印象と感想

吉林大学図書館館長 李書源



2011年2月15日～22日、日本科学協会の招聘に応じ、「第5回中国大学図書館担当者訪日団」の一員として8日間の日本訪問を行った。収穫はとて大きく、感慨も多い。

日本を訪問したのは、今回が初めてである。日本は中国と一衣帯水の隣国で、歴史上も中国とは複雑な恩讐関係がある。また、先進国でもあり、中国と同様、世界経済において重要な位置を占めている。中日関係は世界で最も重要な国家関係の一つと言え、世界の政治構造に通常と異なる影響を及ぼす。中国のインテリについて言えば、最も関心のある国の一位が米国、二位が日本である。そのため、今回の訪日は、自ずと期待に満ちたものであった。

訪日期間中、日本側による手配は非常に充実し、また、可能な限り全面的なものであった。日本の有名な図書館情報学者である田中功先生の学術報告を聴講し、日本財団の笹川陽平会長、日本科学協会の大島会長と会見した。寄贈図書の整備委託会社では、物流倉庫と図書の整備業務を見学し、国立国会図書館、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館を訪問見学した。また、東京、大阪、京都、沖縄の何都市かの有名な歴史的・文化的な景勝地と街並みも見学した。後に真剣に振り返ると、今回の訪日は感謝の旅、学習の旅、交流と理解の旅という3点に総括することができるように思う。

まずは、感謝の旅である。日本財団の創設者である故笹川良一元会長は世界平和事業や中日の友好と文化交流に尽くされたことで高名である。私は、まだ青年教師だった頃、ヤングリーダー奨学基金のお世話になったことがある。日本財団の関係団体である日本科学協会は、長期に亘って中日文化交流活動を推進している。中国の各大学に図書を寄贈し、各種の日本語教育支援事業や日本知識クイズ大会を実施して、日本へ研修に訪れる中国の研究者に助成金を支給するなどし、中国国内で高い知名度を持つ。吉林大学は当初からの図書寄贈対象大学の一つで、協会からの寄贈図書は、吉林大学の蔵書構成の重要な部分を占めている。日本科学協会のスタッフが、多くの困難の中、可能な限り努力して様々なところから探し集め、綿密に手配し、絶えず頑張り続けて中国の大学へ寄贈してくれた図書は、まさに、文化交流の促進、中日友好の増進という善良な目的から出たものであり、真に中日両国民の認識、理解、友好を推し進める行動であることが今回、日本